

OPEN WATER REPORT

オープン・ウォーター 活動報告書

2019

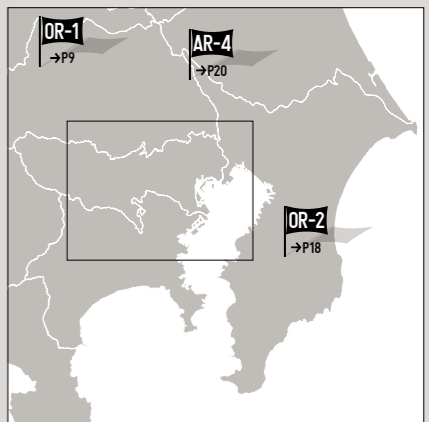


**河川
基金** 公益財団法人河川財団による
河川基金の助成を受けています。

オープン・ウォーター実行委員会



東京周辺の主な河川・水路図



4

5

アートの創造力を通じた水都へのビジョン

陣内秀信

(法政大学特任教授・法政大学江戸東京研究センター初代センター長／オープン・ウォーター実行委員会 監修)

東京の水への関心は、1960年代の急速な経済発展＝大規模都市開発への反省が起こった1970年代の前半から、様々な領域・分野で生まれ、学術的な調査研究と水環境の再生への実践活動を通じて、人々の間で、その重要性への認識が深まっていった。

まずは、環境の視点から、汚染された川や堀などの水を浄化し、緑とともに都市に豊かな生態系と生活空間を取り戻す〈エコロジー〉の立場がある。一方で、都市や地域の〈歴史〉の掘り起こしが生まれ、江戸東京の基層に水の都市としての経験が存在することに注目し、近代の陸の論理の反省に立って、水環境と人間の結びつきを再構築しようとする立場がある。

これらの〈エコロジー〉と〈歴史〉の視点を重ね、クロスさせることにより、江戸を前史とし、それに加え中世・古代の基層をもつ東京ならではの、西洋都市とは異なる自然との共生を遺伝子にもつ日本独自の都市の近未来イメージを世界に向けて提示することができよう。

同時に近年では、気候変動による災害の頻発から守りつつ、水と人間の繋がりを取り戻す哲学と方法が模索される。この課題もまた、水との戦いと水を活かす両面での長い経験をもつ日本ならではの解決への発想を生み出し、世界に発信・貢献できる重要な領域だと位置づけられる。

「オープン・ウォーター」の活動は、このような過去の蓄積を有する東京を舞台に、〈水〉のもつ可能性をアートの創造力から掘り起こすことで、東京を21世紀の水都として活性化しようとするものである。上記のように各方面から長年にわたり耕され、獲得されてきた知見、経験、情報がそれぞれの分野ごとに膨大に蓄積されている。こうした状況において、アートの領域からの自由な発想でそれらを横断する想像性に富んだ企画・方法でのリサーチによって、東京というまだまだ未開拓の領域に鋭く切り込み、そのユニークな

水都のあり方を過去、現在、未来の大きなパースペクティブのなかで描き出すことが期待されるのである。

今年度の活動をみると、各領域を耕し、牽引してきた専門家からのレクチャーのシリーズが様々に行われ、それを通じて、参加メンバーが問題の所在を広い視野から把握する一方、実際に東京各地のフィールドに飛び出し、実に貪欲な現場での調査を通じて、水と地域、都市、そして人間との関わりを身体で感じ、理論化に結びつける実践的な活動を展開してきたことがわかる。

そこから浮かび上がる論理としては、日本独自の地形・自然条件から由来する川の形状や水の特性により育まれた精神風土、自然観があり、都市や地域の姿、その仕組みの固有性、そして水と結びついた多彩な文化が発達したこと。多様な水資源があり、生物多様性も生まれ、海や川に生物の様々な生態が観察されること。過去においては、治水あるいは水防への人々の意識が高く、水への畏怖の念をもちながら、水と多様に付き合い、その恩恵を受ける社会・経済・文化の活動が見られたこと、また近代の水離れでそれが希薄になった現状を見直し、再度それを取り戻す必要のあること。下町低地、都心のみならず、武蔵野、多摩、東京湾へと視野を広げ、東京圏全体としての水循環の仕組みを理解し、また多種多彩な水の風景、生活シーンがあることをダイナミックに理解する必要のあること。

以上のような得られた研究の成果を、拡大深化させ、独自の切り口を増やし、東京圏に潜んでいる価値あるエリアを発掘しつつ、理論化にも努め、新たな東京の水都像を描いていくことが展望される。

水に関する個別研究領域の中からは、こうした総合性をもった水都へのビジョンは生まれにくい。さらに継続的にアートの創造力を通じてこそ、その可能性が開けると思われる。

オープン・ウォーターについて

オープン・ウォーター実行委員会は、2018年3月に東京ビエンナーレ2020の企画ディレクターの一人*として構想したプロジェクト「オープン・ウォーター～水(*)開く」**とともに活動を開始しました。

水は、人為的な境界(物理的、社会・政治的)を超えて、「おのずと」流れます。水は様々な形をとり、世界に偏在し循環しています。私たちの身体内や環境においても相互流通しています。「オープン・ウォーター」は、生命の源である「水」から社会や環境をあらためて考えていくまなざしに支えられています。

「オープン・ウォーター」の直接的な源流は、2011年の東日本大震災に遡ります。以降、水に関わるリサーチを踏まえ展覧会を実施してきた筆者と、たゆまぬ自然、社会、歴史、文化へのリサーチを続け水の重要性を共有する有志たちが2年前に実行委員会を形成し進めてまいりました。

「オープン・ウォーター～水(*)開く」は、東京の歴史において豊かな水脈が果たしてきた役割をあらためて確認するとともに、水のもつ可能性をアートの創造力から掘り起こし、東京を21世紀の水都として活性化しようとするものです。東京は水に恵まれ、江戸時代には舟運が発達し水都として栄えながら、明治以降の近代化で水の制御が進み、1964年の東京オリンピック以降、水は都市の背後に追いやられてきました。2020年夏のプロジェクトでは、水をめぐる複数の展示やイベント、ツアーを街なか、水辺、水上などで展開することで、人々と水との新たな関係を開く機会をアートを介して創出する予定です。

河川財団からいただいた2019年度の助成は、今夏開催の「オープン・ウォーター～水(*)開く」を中心に据えながら、東京の水について幅広くリサーチすることを目標に活用いたしました。研究会、フィールドワークやアーティストによるリサーチ、オリジナル・イベントOpen Water Picnicのプロトタイプなど多面的な活動を行い、本報告書にまとめました。多くの方々にご高覧いただき、東京の水を、日常そして地球規模で再発見いただける契機となれば嬉しく存じます。

これまで東京の水の歴史、文化、環境・生態系、土木・インフラ、防災、街づくり、水辺活性化など様々な活動に長年関わってこられた各分野の方々に多大なご協力やアドバイスを賜りました。お礼を申し上げますとともに、引き続きご指導ご鞭撻のほどをお願いいたします。

2020年3月31日

オープン・ウォーター実行委員会 ディレクター 四方幸子

*2020年9月に東京ビエンナーレの「連携」プロジェクトとして独立

**タイトルの ()内に助詞を入れることで、複数の意味が生まれます。「水を開く」「水に開く」「水は開く」「水へ開く」「水と開く」「水で開く」

調査 / 研究 / オープン・ウォーター・ピクニック | レポート

2019		
6.14	OR-1 長瀬川下り	9
7.4	S-1 陣内秀信 水の都市比較ーヴェネツィアと江戸東京 形・機能・意味の視点から	10
7.25	S-2 土屋信行 東京の治水と今、迫りくる水害の危機	11
7.28	P-1 Open Water Picnic Vol.0 新大橋 [水のプレイリスト: 狩生健志]	12
8.12	AR-1 やんツー 渋沢栄一と「水」と「お金」	13
9.14	S-3 竹村公太郎 地形・気象で育まれた日本の精神性そして近代化	14
9.14	P-2 Open Water Picnic Vol.1 大気の入江 for OPEN WATER 2019年9月14日新木場 [パフォーマンス: 大気の入江]	15
12.13	AR-2 AKI INOMATA ミズクラゲの生態と東京湾について	16
12.25	AR-3 齋藤彰英 等々力渓谷および多摩川河川敷	17
2020		
1.13	OR-2 市原市 - 市原湖畔美術館と周辺	18
1.18	OR-3 カヤックで巡る東京都心の川	19
1.27	AR-4 山川冬樹 首都圏外郭放水路: 地下神殿にみる世界の姿	20
今年度の成果と今後に向けて		21

PRE-RESEARCH / これまでのリサーチ 2018-2019

2018.6.25	神保町～神田リサーチツアー	24
2018.6.30	大伝馬町～日本橋リサーチツアー	24
2018.10.13	ミツカン水の文化センター「第10回 発見! 水の文化～船でめぐる東京の水辺(江東の内部河川編)～」	24
2018.11.24	羽村取水堰、村山貯水池(多摩湖)	25
2018.12.16	両国～深川～洲崎 水辺の聖と俗～江戸の風景を訪ねて	25
2019.1.27	東京ウォータータクシー (TWT)で巡る河川と高橋散策	26
2019.2.21	オープン・トーク Vol.0『マイパブリックとグランドレベルと東京の水辺』	26
2019.3.22	中央防波堤埋立処分場	27

文献リスト	27
江戸・東京年表《水運形成に見る都市の発展》	28-29

OR-1 オープン・ウォーター・リサーチ **S-1** 研究会 **P-1** オープン・ウォーター・ピクニック **AR-1** アーティスト・リサーチ

講師・ガイド 開催日 開催場所 企画者 参加者 同行者



OR-1 オープン・ウォーター・リサーチ-1

長瀬川下り

2019年6月14日 埼玉県秩父郡長瀬町荒川
 アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

東京を流れる代表的な河川「荒川」。荒川は明治期の大水害を機に1911年から護岸工事や、岩淵水門以下を中心とした大規模な放水路開削工事が行われ、都心部を流れる隅田川と、低地を流れる荒川放水路が形成された(後に、荒川放水路は荒川と名称を改められた)。そのため都内を流れる荒川は、言わば上下水道の一部として、あるいは巨大インフラ構造物として、東京の景色を作り出している。

しかし、そうした人工的な荒川であっても、そこを流れる水は元を辿れば自然地形から流れ出た水である。そのことに着目し、埼玉県秩父郡長瀬町に見られる荒川の様子、あるいはその周辺の地勢的な風景の現れをリサーチした。

リサーチでは、長瀬で行われる川下りの船(運営: 秩父鉄道)に乗船し、自然地形としての川、あるいは水面から見る兩岸の地形観察を行った。

甲武信ヶ岳を水源とする荒川は全長が173kmに及ぶ。リサーチ場所の長瀬はその起点から直線距離で30kmほど下った場所に位置する。乗船区間は、親鼻橋から高砂橋の6km。これを45分ほど掛けてゆっくりと下る。しかし大きな岩によって川幅が狭まる箇所では、流れが速まり船は水しぶきを被ることもあった。また、川下りの船頭によれば、この長瀬から河口の東京湾へは、

おおよそ2日かけて水が流れ出るという。周辺には三波川^{さんばがわ}変成帯・秩父帯・四万十帯など、異なる地質帯が分布している。川の兩岸には三波川変成帯が露出する岩場が多く見られ、特に結晶片岩からなる「岩畳」と「赤壁」が、長瀬特有の水墨画の様な風景を作り出していた。この三波川変成帯は、中央構造線(西日本から関東を縦断する断層)の太平洋側に分布する地質帯である。その三波川変成帯特有の緑色変成岩も川沿いには確認でき、中央構造線がこの地域にまで連なっていることを実感させる。

川下りの途中には、大正3年に竣工した煉瓦造りの荒川橋梁があり、その周辺には以前に使われていたであろう破損した橋脚の一部が川底に見られた。

長瀬の地名由来は、流れの緩やかな場所を意味する瀬^{とろば}場に由来すると聞く。先にも述べたようにリサーチ当日も静かで穏やかな情景を見せてくれた。しかし船頭によれば、荒川の名称通りに台風や大雨の際には、15m以上ある崖地上部まで水量が増すという。川底に見た煉瓦の塊は、その流量の激しさを想起させた。

河川リサーチとは別に、長瀬には天然の製氷技術が残っていることに驚かされた。現在は1軒のみになったが、今でも阿左美冷蔵が製氷業を行っており、その氷を使った“かき氷”が名物となっている。天然

氷は、山間部の陰地に11月ごろから水を張り、冬季に時間をかけて製氷している。かつてはこの地域に十数軒ほどの製氷業者があったともいうが、この技術の元は、明治期の養蚕業において氷を使った孵化期の調整が目的だったと言われている。氷で室温を下げ、蚕の孵化を遅らせることで生産回数を増やしたようである。同様に、近隣の長野でも、その技術を用いて養蚕業が大きく発展したという。このエピソードは河川だけでなく生活文化において水が作り出す景色について検討する一つの機会になった。

今後に向けて

東京都心部を流れる人工河川と、自然環境と密接に関わり流れる河川。私たちは日常の中でこの異なる二つの川が、一つの川であることを忘れていた。今後のリサーチでは、長瀬よりもさらに上流部の荒川や、あるいは中流部に出向き、都心部に流れ込む水がどのような景色を作り出し河口に至っているのか、その全貌を丁寧に汲み取り、一面的な人工河川の荒川としてだけでなく、その水の中に込められた豊かさを確認していく。(齋藤彰英)



S-1 研究会-1

陣内秀信 | 水の都市比較—ヴェネツィアと江戸東京 形・機能・意味の視点から

● 陣内秀信(法政大学特任教授・法政大学江戸東京研究センター初代センター長) 📅 2019年7月4日 📍 法政大学 ポアソナードタワー (市ヶ谷)
👥 栗生はるか(法政大学江戸東京研究センター)、狩生健志(音楽家)、アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、下山ふみ、山本敦子

本来都市と水は、経済や暮らし、文化などを通して密接に結びついている。日本も同様で水を多種多様に活かしてきた。特にかつての東京、江戸は水辺で発展した都市であることが特徴的だ。江戸はヴェネツィアのように浅瀬に発達し、運河を網目のように巡らせ、舟運で都市の経済や文化の活動を展開させたため、水辺にオープンな公共空間が出来上がったのである。そこには、料亭や遊郭など風俗建築が並び立ち、人間の様々な活動が集まっていた。水害との付き合いも水の都市江戸ならではの側面である。人々はお互いに協力し合っ

て水神社を建立し、土を積み上げ川の付け替えを行い、水害から身を守ることを通してむしろその状況を楽しみ、助け合いの精神を養っていった。これらと同時に、人々は水に対して畏敬の念を抱いていたことから、水辺は祭祀を行う聖なる場ともなっていた。このように、江戸には水にまつわる大きなネットワークが形成され、建築のあり方や人間のピヘイピア、メンタリティが規定されていたのである。

しかし、このような水と都市のつながりは、近代化が進むにつれ薄れてしまう。産業が発展して陸にあらゆる機能が集中する一方で、水は汚染され、水辺には工業地帯や物流機能ばかりの大規模な港が出来上がって、人々の営みから離れてしまったのだ。そして今や、水辺のエリアのほとんど

を私有地が占め、公共空間ですらない。さらには、水との関係で建築や都市を研究する人もいなくなった。そのようななかでここ数十年の間、原点に戻って、水への関心、水の空間の別の意味や機能を考えるという流れが再び世界中で高まりつつある。

陣内氏は、同じく水の都市として有名なヴェネツィアを参考にしながら、「水都学」を用いて江戸東京と水との関係性について空間人類学的に調査することで水の研究を進めている。

また陣内氏は、研究と並行して様々なプロジェクトにも関わっている。平成9年の河川法改正で、地域の風土や文化を形成する川づくりが奨励されるようになると、水辺の新たな可能性を創造していくことを目的としたプロジェクト「ミズベリング」が開始された。この「ミズベリング」のもとで、人々が水辺を様々な形で使い楽しむことが可能になった。地元の合意を得て、各地に水辺のカフェが生まれている。しかし、このようなプロジェクトを進行する上で必要なネットワークがまだ不十分であることも言及する必要がある。何故なら、東京はそれぞれの地域に有力な企業・団体が多数存在し協力関係を築くには時間と労力がかかる上、都市ではなく経済にしか目が向いていない企業と連携することは容易ではないからだ。それゆえ陣内氏は、水辺の魅力や可能性を探求しながら、それらに関心があ

る人にもない人にも訴えかけ、若者を沢山取り込んでいながら、みんなで盛り上げていくことを今後のプロジェクトの展望としている。東京は水都としての特徴・個性を再発見していきながら、サステナブルな都市発展を実現させる必要があり、そこにおいて水都学は大きな役割を果たすと言える。

所感

水や河川というのは、地理や文化、建築を支える一要素でしかないという認識が今まではあり、学校や研究においてもそのようにしか学んでこなかったように感じるが、実際には水や河川が文化的空間や人々のあり方そのものを形成する源であることを知ることができた。そして、水は私たちの生活を支えるだけでなく、文化的に豊かにしてくれるものであると感じた。そのため、専門的な知識をもつ人々と協力するための綿密なる調査研究と、専門知識をもたなくても水と触れ合える多様なプロジェクトとの両方を通して、水にまつわる新しい視点が、広く社会に伝えられていくべきである。身の周りのものがどのようにして私たちの空間をつくり上げるのか、それらから何を生み出せるかを、私たちが改めて考えるきっかけになるはずである。(下山ふみ)

S-2 研究会-2

土屋信行 | 東京の治水と今、迫りくる水害の危機

● 土屋信行(公益財団法人リバーフロント研究所理事・技術参事) 📅 2019年7月25日 📍 リバーフロント研究所(茅場町)
👥 アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、白井ふゆ

近著『首都水没』『水害列島』をはじめ、東京の水防災の専門家として活動する土屋信行氏に東京の治水について話をうかがう研究会は、「治水に関して普段から何か疑問は?」という本人の問いかけから始まった。「東京がゲリラ豪雨に見舞われた際はどうかしたらよいのか」「東京が一番危ないのか」などの疑問を検討し、「今、迫りくる水害の危機」について再認識していくことがこの日の主軸となった。

東京の治水の何たるかを知るためには、まず昔の東京の地形から紐解くことになる。遡ること約400年、利根川は現在の江戸川が流れている位置を、太日川(おおいがわふといがわ)という名で東京湾に流れこんでいるのが確認できる。しかし80年後の地図を見ると、川が流域を変えたことが確認できる。これは、徳川家康の命令により成された「利根川東遷」(利根川の流れを東に移す)という大川事業によるものである。本来、河川は自然の地形に合わせて時間をかけて形成されるが、それを人間の都合に合わせて人為的に河川の流れを変えていることが洪水の原因である。地形や自然の形を尊重すべきだと土屋氏は言う。目には見えずとも、地表に現れている河川以外にも地面を少し掘れば水があり、利根川のように元の形から流域を無理やり変えたことが河川氾濫の要因になっている。「水の低きに就くが如し」、自然の脅威と及ぼす影響

について、私たちは深く知る必要がある。

洪水や水害は民族性と関係があるだろうか。例えば、「水」という一つの共通したカテゴリにおいて、ヨーロッパの狩猟民族はそれを「飲み水」として認識してきた。枯渇すれば牛やヤギの乳をその代わりとして利用できた。それに対し、わが国のような農耕民族は「灌漑」を発展させ農地を緑化し、主に農業や畑業により食糧を得ていた。そのため、河川の流域に暮らす人々には洪水と共存する知恵が必要だった。これが四大文明が起きることに繋がった。

昔から洪水に悩まされていた日本人は洪水対策に力を注いできた。荒川の氾濫を防ぐため、日本堤と隅田堤を築造し、その間を遊水池とし、さらに、堤防の上を路にすることで、人々の歩みにより踏み固められて強度を上げるなどの工夫を凝らしてきた。江戸時代に造られた橋は代を重ねて現在も残っており、荒川の赤門は近代土木遺跡として残っている。水害対策がすすむ一方で明治43年には大洪水に見舞われ、被災者の一部は国技館に避難したものの多数の犠牲者が出た。また、大正6年には大海嘯^{かいしやう}と呼ばれる高潮大災害により1324名の死者、昭和22年にはカスリーン台風により利根川の栗橋上流地点で堤防が決壊、被災者は水害バラックでの生活を余儀なくされた。このように現在に至るまでも水害対策は十分であると言い切れない状況

にある。

東京東部低地帯は利根川や荒川が運んできた柔らかい粘土が積み重なった沖積層が厚く堆積しているため、地下水の汲み上げで約5mもの地盤沈下が発生してしまった。地盤沈下による水の侵入を防ぐため、海岸堤防のかさ増しは続けられているものの東京湾周辺、江東区・墨田区・江戸川区などの海拔ゼロメートル地帯への対策が急がれる。避難予想人数に対し、避難所の収容人数が下回るため、250万人もの住民の近県への広域避難も決定している。最悪の場合、関東の内陸である埼玉県辺りにまで高潮の被害が及ぶであろう予想データも算出されている。

私たちの暮らす東京、特に下町には水害の危機が迫っている。「いつか来る、ではなく必ず来る」という言葉があるように、災害が起こってからでは遅いのは言うまでもない。にも関わらず私たちはリスクを軽視している傾向にある。特に水害対策は、人の生活を再建するために多大な時間を要する。一刻でも早く対策が進むのを願うとともに、水害の脅威と知識をより深め、広めてゆくべきである。安全に慣れすぎている、油断は大敵である。

綿密な調査と実践に裏付けられた土屋氏の言葉は、2020年秋の台風で実証されたといえる。(白井ふゆ)



P-1 オープン・ウォーター・ピクニック-1

Open Water Picnic Vol.0 新大橋

📍 2019年7月28日 15:00~18:00 📍 新大橋 📍 アベキヒロカズ

水のプレイリスト：狩生健志(音楽家) 協力：赤羽卓美(お茶)、ミカサ商事(機材)

👤 赤羽卓美(クリエイティブディレクター、ゲームクリエイター)、田中宝夫(ミカサ商事)、アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

「Open Water Picnic」(以下OWP)は、オープン・ウォーター実行委員会が企画する、水辺で人々と水との関係を新たに開くオルタナティブなピクニックである。2020年夏開催の「オープン・ウォーター〜水(*)開く」で、毎回アーティストやクリエイターを招聘し、水辺のサイトを決定し、環境要素を取り入れながら視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚など様々な知覚を刺激するピクニック・イベントとして実施予定である。その場所の歴史や文化的な背景に触れることも重視している。

今回はOWPの初の実験として「Vol.0」とし、オープン・ウォーター実行委員会のアベキヒロカズが企画、本人が住む森下〜新大橋エリアでの開催となった。新大橋は、隅田川沿いであるだけでなく、「水」にゆかりのあるエリアである。江戸時代に架けられた新大橋があり(大橋は200m下流にあった)、当時川岸には幕府の御座船・安宅丸の繫留地があり御船蔵が並んでいた。この橋は、歌川広重が浮世絵《大はしあたけの夕立》で描いたことでも知られ、松尾芭蕉は新大橋近辺に庵を結んでいた(近くに江東区芭蕉記念館がある)。また新大橋と両国の間には、水羊羹が名物な和菓子の老舗・越後屋若狭(江戸の地創業では最古という)が店を構えている。

当日は、前半に深川神明宮(深川発祥の神社とされる)、新大橋橋名板(八名川小学校

に保存され道から見る事ができる)、安宅丸繫留地跡、御船蔵跡など、この地の水に関わる歴史をめぐるツアーを行い、後半は隅田川テラスの一角(新大橋の北にある一之橋の東、両国JCTの下)に落ち着いた。

隅田川は、常に船が行き交い、風、水のためたいや音、匂いなどが変化する独特の環境要素を持っている。開催した場所では、頭上を行き交う車の騒音も含め、環境音が常にダイナミックに変化する。また日差しや風や匂いなど、様々な要素が体感される。人々が日常的に散歩やジョギングを行う場所でもある。シートに座って、そのような環境をまず味わった。

赤羽卓美は、自ら栽培した茶葉を自ら焙煎した日本茶と紅茶を振る舞い、越後屋若狭の水羊羹とともに皆で楽しんだ。音は、様々なジャンルを取り込むロックバンドOWKMを主宰しCMや映画音楽も手がける音楽家・狩生健志が今回のために厳選した「水のプレイリスト」(約90分)で、クラシック、演歌や洋楽、映画音楽、現代音楽まで幅広くカバーされている。水や風の音、船や車の行き交う音に満ちた環境のなか、異なるジャンルの音楽に出会う驚きと楽しさ。各人が環境と音の関係を自由に享受し解釈しながら、聴覚や諸知覚が研ぎ澄まされていった。本ピクニックでは、高品質スピーカーの協力を得、ご担当の田中氏に参加いただ

いた。極上の高中低音を全方位に届けるハイレゾスピーカー「UPstage360」、そしてアウトドアに気軽に持ち運べるワイヤレスBluetoothポータブルスピーカー「DASH7s Siri® Version」の二種である。刻々と変化する隅田川のサウンドスケープを背景に、各スピーカーで音の違いを堪能するという貴重な体験となった。

音、風、触感、味わい、匂い…周囲の環境とOWPでしつらえた要素が混じり合い、偶然の出来事も相まって複合的な知覚体験を生み出していく。刻々と変化する日差しや水位も含め、「生きた」環境に身を委ねていく贅沢な時間を共有することができた。

ピクニックは、公共的な場所の一角を「発見」し、人々が一時的にそこに留まりその環境を共に楽しむイベントである。それはまた、公と私が混じり合う創造的な時間-空間と言える。近年、公共空間では、一昔前と比べ規制が多くなっている。イベントや集会に申請が必要なものもある。公共空間は誰のものか? いかにか公共空間を開いていくか? これらもOWPのテーマの一つである。今回実際行ったことで、初めて知覚したことも多い。水辺に触れ、水辺を再発見し楽しむためのOWPを、本番ではどこでどのように行っていくか。今回の実験は、9月予定の「Vol.1」や2020年夏に向けての気づきを得た意味でも実りの多いものとなった。(四方幸子)



photo: yang02

AR-1 アーティスト・リサーチ-1

やんツー | 渋沢栄一と「水」と「お金」

アーティスト：やんツー 📍 2019年8月12日 📍 日本橋〜兜町〜茅場町

👤 四方幸子

8月12日、オープンウォーター実行委員会代表の四方幸子氏と共に、日本橋界隈の水と経済にまつわる土地をめぐるリサーチツアーを敢行した。2019年の頭から同プロジェクトと関わりはじめ、水と東京というキーワードで作品を構想するにあたって、このツアー以前に単独で日本橋界隈を簡単にリサーチした際、ひときわ印象的だったのが川を挟んで日本銀行裏手にひっそりとそびえ立つ渋沢栄一像だった。その後、日本橋界隈の水に関する調査を進めていくと、この国が近代化する以前、日本橋周辺は城下町として川の存在が物流を支える大事な機能を担っていたこと、つまりその当時の経済を支えていたということを知る。すなわち、数百年前から現在にかけてもなお国の経済を支える土地であり続け、その仕組を支えていたインフラは、川(水)から近代化の中で進化していくテクノロジーに変わっていったといえる。江戸時代から絶えず「流れ」が生じている土地でつくり上げる作品のテーマとして「水」と「お金」は非常に親和性が高いモチーフになりうると考え、今回のリサーチではその2点にまつわる場所を、主に四方氏の提案の中から重点的に見て回った。

集合場所の東京駅日本橋口からまず足を運んだのが、やはり渋沢栄一像。最初に出会った時は「何年後かにお札の肖像に

なる人」程度しか、まだ渋沢についての知識を持ち合わせておらず、その後、ある程度彼について調べ見識を蓄えたので、やはり一回目の対面時の印象とは多少異なって見えた。それは、まだ髷を結って刀で他者を斬りつけていたような時代に、欧米に派遣された経験から資本主義という、当時最先端の社会システムをいち早く理解し、日本に資本主義をもたらした偉大過ぎる人物であるということ、一方で調べていくと時代の功罪のようなものもたくさん背負って批判もあるということ。そんなアンビバレントな印象である。

その後、常盤小学校を經由し、日銀や東京証券取引所ビルなど、日本の経済の中核となる建物がひしめくエリアに移り、それらのビルを確認するように散策し、いかにこの土地に経済の機能が密集しているかを体感した。移動の際は当然、その一帯を流れる川沿いを歩き、数々の橋を渡り、いやが応にも水の存在を感じるようになる。美術家である私は、このような機会がない限り、この辺りは普段まず歩いて移動することがないので、この土地に水が張り巡らされているという事実をリアルに感じられるだけでも新鮮である。また、日本橋の橋そのものや、日本銀行、その他の有名商業施設は訪れることがあっても、それは「点」としての認知であり、歩くことでそれらが線として

繋がりがダイナミックに脳内マップが構築されていき、「土地勘」が身体的に宿る感覚を味わうことができた。

この日、終盤の目的地の一つであった渋沢の旧居住地に建つ日証館は祝日のため、あいにくの閉館で、その裏手の川沿いの空き地を見学。作品のアイデア思案は屋外にまでおよび、その後兜神社を見学し、茅場町の河川付近で解散となった。

今回のリサーチでは、あるスコープ(テーマ)で切り取り、普段とは違う視点で街を確認して回ると、その土地の別の一面が如実に見えてくるということを体験することになった。ある対象が持つ別のポテンシャルを引っ張り出してきて提示してみせるということは、芸術作品全般が本来持っているべき社会での役割(機能)であり、そういったことを感じながら確認するようにツアーができたのは美術作家として大変有意義な時間であったと思う。またこういった現場での調査は、インターネットや書籍で得る情報と比べると、より人間の感覚器官を多く使うということもあるので、その解像度は格段に高い。あるいは脳だけで知覚する言語的知性を補完するための、身体的知性を獲得するためのフィールドワークの重要性を改めて認識した。(やんツー)



S-3 研究会-3

竹村公太郎 | 地形・気象で生まれた日本の精神性そして近代化

👤 竹村公太郎(特定非営利活動法人 日本水フォーラム代表理事) 📅 2019年9月14日 📍 日本水フォーラム(茅場町)
👥 アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、下山ふみ

冒頭に、オープン・ウォーター実行委員会の四方幸子より、オープン・ウォーターについて説明、その後質疑応答形式で進めた。

竹村氏は長年建設省において河川事業とダム工事に関わり、キャリアの前半では地質調査とともにダムの設計、現場監督、プロジェクトのマネージメントによる「ものづくり」に携わり、その経験を活かして、後半は地元住民やマスコミとの「対話」を行なった。地元住民にとってダムは、生まれ育った土地、人生、思い出を根こそぎ奪う迷惑な施設である。だからこそ、彼はダムの構造などを一方的に説明するのではなく、自身が地質調査などで培った地形・気象の知識を用いて、ダムの機能が次世代の人々の豊かな都市生活のために必要であると訴えかけたのである。この時の経験が、地形や気象から日本の文明・日本人そのものを紐解くという新たな観点を自身にもたらし、現在の活動につながっていく。

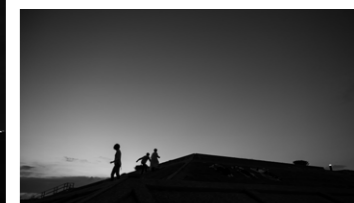
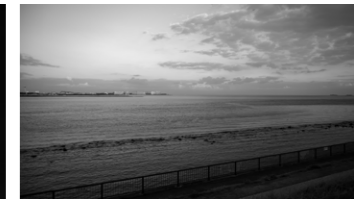
その上で、竹村氏は日本の精神性は日本特有の地形・気象に因るところが多いと述べている。たとえば、ローマ人やモンゴルの騎馬民族が平坦な道を大掛かりに突き進んでいったのに対して、日本人は起伏の激しい土地、河川の多い土地を、荷物を背負って自分の足で歩いていかなければならなかった。その負担を軽減するため

に、携帯する物をコンパクトにする必要があったのである。そこから生まれた、細かく作りこんで物を軽く、小さくするという精神は日本人の特徴となった。物を細かく細工していく傾向は、現代にまで受け継がれており、ウォークマンやカップヌードルなど日本人が発明した人気商品になった。さらに細工をしない人、詰め込まない人を「不細工」や「つまらない」といった人を貶す言葉にさえ使われている。

また、江戸時代の250年間、各地の大名がそれぞれの地域の河川流域に封じ込められていたことも、日本人の精神形成に大きく関係している。徳川家康が天下統一をしてからは、戦さによって尾根を越えて領土を膨張させることを禁止した。そのために、地方の大名たち権力者は、地元の人々の豊かな都市生活のために必要である河川流域に封じ込められていた。その結果、人々は流域の外へ出てはならず、流域の中で生活することが大前提となった。限られた流域のなかで生存するためには、限られたものを最後まで使って大事にしないといけなという考えが生まれた。そこから日本人特有の「もったいない(勿体無い)」の精神が育まれていく。それに加え、日本では半年間の稲作などで1年分の食料を作らなければいけなかった。制限のある時間の中で一生懸命に働かざるをえなかった。だから、日本人が時間に正確で懸命に働くのは必然的といえる。

さらに、日本の土地に水がふんだんにあること、そして稲作文化が人々のメンタリティーに与えた影響も特記すべきである。昔の人々は村の共同体を作って水を引っ張ってきて共に生きてきた。稲は貯蔵可能な食料であるだけでなく、物々交換をするためのお金でもあり、重要な富であったのである。ゆえに、特に稲作のしづらい湿地帯や、危険なところでさえも、その不利な地理的状况を乗り越え、稲作を始め、富を求めた。そのような農耕人の性質が現代の日本人に受け継がれている。

このように、私たち日本人は周りの環境を受け入れ生きてきたが、近代化によって何か大きなものを失ったのではないかと、という疑念が生まれてくる。近代に入ると鉄道が敷かれた。それは全て東京に向いていた。東京一極集中が始まった。大都市は自然を排除し、人工空間を作り出した。それゆえに、流域に生きるという概念が失われ、流域ごとに生まれた多様な文化圏があやふやになってしまった。地方特有の精神をもった人々が、極度に東京に集中してしまっ。その結果、このままで本当によいかという議論が上ってきた。水辺のゴミを拾う活動などを通して、江戸時代を共同体を思い出し、流域を中心とした日本人の共同体を取り戻そうという動きが始まっている。(下山ふみ)



P-2 オープン・ウォーター・ピクニック-2

Open Water Picnic Vol.1 大気の入江 for OPEN WATER 2019年9月14日新木場

📅 2019年9月14日 18:00~20:00 📍 新木場緑道公園 🗺️ 四方幸子 パフォーマンス：大気の入江(アートユニット)
👥 天野典子、下山ふみ、瀬藤康嗣、杉本格朗、難波祐子、三浦秀彦、山本美紀、アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子

大気の入江は、デザイナー・三浦秀彦、サウンドアーティスト・瀬藤康嗣、漢方家・杉本格朗によるアートユニットであり、アカンパニスト(伴奏・伴奏)として難波祐子も参加している。普段「お茶とリスニング・インスタレーション」という茶会になぞらえたイベントを催し、五感を通してアートを体感する場をつくっている。

2回目となる(「Vol.0」から数えて)「Open Water Picnic Vol.1」では、大気の入江のイベントを屋外の水辺に持ち出した。感覚に働きかける彼らのパフォーマンスを通して、さまざまな知覚を開き東京の水を深く感じるという趣向である。また、開催日がかつて江戸期にあった夜通しで月を愛でる催し「二十六夜待ち」の時期に設定し、江戸の遊びを現代人なりに追体験してみるという試みでもある。

会場となった新木場緑道公園は、荒川が東京湾に至る河口に面する緑地で、南北に約1.5kmちょうど堤防のように細長く伸びている。園地の東側が川と海に開けていて、月の出から月の動きを見るのに適している。そして、なにより水に近いということで開催地として選ばれた。

当日は晴れてイベント日和となった。夕刻、待ち合わせ場所に大気の入江メンバーが迎えに来た時には、すでにパフォーマンスは始まっていた。イベントのメイン会場となる場所まで徒歩10分、そ

の道すがら公園で拾ったと思われる缶をスロープに転がして音を楽しんだり、道端の野草の葉(のちにヨモギだということが分かる)をもいで香りを楽しんだり、三浦の持った枝(これも公園の木から落ちたもの)に導かれてブラインド・ウォーク(目隠しして目の開いている人に誘導してもらう体験学習)をしたりさまざまな体験をした。思えばこの時に知覚のあらゆるチャンネルが開かれていたのだろう。移動の終盤には、各自が良いと思った松ぼっくりを拾うようにと指示があった(緑道には潮風を防ぐために松が多く植わっている)。

メイン会場は、公園敷地の南端で東京湾を臨む角地。海と陸地の境界線のような場所で、歩いてきた緑道から一段斜面をつたって降りたところにあった。

会場に着くなり、瀬藤は柵越しに紐のついたビニールバケツを海に垂らし海水を汲んだ。一方、三浦は満月を摸したような銅板を空に掲げ斜面を下ってくる。なにかのセレモニーのようにも見えた。銅板は柵の角に設置され即席のバーカウンターとなった。カウンター越しに広がる東京湾。海上に浮かぶタンカーや貨物船を眺めながら杉本のウェルカムティーを飲んだ。お茶の内容は松とヨモギなどを煮出したものだという。そう、まさに会場までの緑道で触れた植物のお茶だった。(公園のものを利

用したかったが、衛生的に今回のために用意したものを煮出したとのこと)いっしょに用意されたクルミを割って食べながら次第に陽は落ちてマジックアワーに。

瀬藤より一杯の水が配られる。飲むとどことなく柔らかな塩の味。説明によると、体液と同じ濃度をもった食塩水で生理食塩水と呼ばれるものとのこと。生理食塩水は海水を約3倍に薄めたものだという。さすがに最初にビニールバケツで汲んだ海水を使ったものではなかったが、瀬藤の海水を汲むパフォーマンスのイメージが手伝って東京湾の水を擬似的に味わう体験となった。

斜面に横たわり潮風の音や匂い肌にあたる触感を楽しんでいるうちに、日はすっかり落ちていた。気づくと東の地平線にオレンジ色の物体。最初それが月であることが分からないほど、美しいつくりもののような満月が昇っていた。

刻々と昇る月を見ながら、最初に拾った松ぼっくりで火を起こし茶を淹れる。その土地にあるものをつかってその土地を楽しむ、大気の入江のパフォーマンスは、最初から最後まで東京の水辺を五感で味わいつくすひと時となった。(アベキヒロカズ)



photo: Yukiko Shikata (left), AKI INOMATA (up and down right)



AR-2 アーティスト・リサーチ-2

AKI INOMATA | ミズクラゲの生態と東京湾について

アーティスト: AKI INOMATA ヒアリング: 東京海洋大学石井晴人准教授 ①2019年12月13日 ②四方幸子

本企画のリサーチに参加するにあたり、東京湾に着目した。その海は東京に住む私たちにあって決して身近な存在ではない。埋立地の拡大に伴い干潟や浅瀬が激減。環境汚染は70年代にピークを迎え水質悪化が深刻な状況となった。環境保全の取り組みがなされる現在では水質が改善されてきているが、東京の海とそこに棲む生き物達はどのような状況なのだろうか。東京湾の生き物の中から「水」というキーワードに近いクラゲを選んだ。クラゲは身体の99%が水で出来ている。中でも東京湾で最もよく見られるミズクラゲについて研究者の石井晴人先生に話を伺った。

Q.クラゲ大発生ニュースを度々目にしています。現在の状況とそこに見られる東京湾の環境変化を教えてください

A.ミズクラゲの数を継続調査しているが、近年のミズクラゲは一定の数を維持している。80年代と比べ東京湾の水質は改善し、クラゲの大発生は起きていない。東京都が下水の処理を強化した。下水処理水は東京湾に放流されるが、水の濁りや生体へ大きな影響を出すリンや窒素が大部分が取り除かれるようになっている。

但し他の海に比べると今も濁りは強く、水中は見通せない。

Q.ミズクラゲを観察する方法

A.研究室ではミズクラゲの成体およびポリプを飼育。

ポリプは海水入りのボールに入れたプラスチック片の裏面に固着させて飼育。研究室ではポリプを継代飼育中。成体はエアポンプで水流を作った円状の海水水槽で飼育。寿命は約1年で徐々に体長は大きくなる。東京湾では4~9月に観察でき、最も多いのは夏。その時期に船上から水面を見るとミズクラゲを容易に見つけられる。採取する場合は柄杓やタモ網で傷つけないよう注意深く扱う。特にミズクラゲはパッチという群れを作るため大量採取がしやすく、新江ノ島水族館等で展示中。ポリプは、東京湾の栈橋の底等に付着している。標本はホルマリン漬にする。

Q.東京湾で見られるクラゲの種類

A.ミズクラゲ:最も多い。野生個体は動物性プランクトンのみでなく他種のクラゲも摂食。東京湾と小笠原では形状が異なり、東京湾のミズクラゲは生殖腺が馬蹄型。小笠原はハート型で水族館で人気がある。東京湾とカリフォルニアのミズクラゲは遺伝的に同一。

シミコクラゲ:ミズクラゲの餌となる。ミズクラゲ発生より少し前の2月頃から見られ3月にエフィラになる。約1cm。

カミクラゲ・オワンクラゲ:3月頃から。

アカクラゲ:水面よりもやや深い水深20mくらいに生息。船上からの発見は難しい。ヒドラクラゲ、タマゴフタツクラゲ、タコクラゲ。クラゲ以外では、ヤムシ、牡蠣、イガイ他。

Q.生体展示向きのクラゲとは

A.サカサクラゲが最も飼育が容易で、死ぬことは殆どない。体内で植物と共生しているため餌やりの頻度が低い。東京湾には生息せず。ミズクラゲも比較的容易。餌は孵化させたアルテミアをピペットで与える。クラゲごとに適温が異なるためインキュベーターを分けて飼育。

Q.研究室で進めている研究とは

A.ミズクラゲの生態系におけるインパクトを解明している。ミズクラゲのパッチの発見方法や、詰まったミズクラゲの処理方法を模索。電力会社が冷却水を汲みあげる際ミズクラゲが詰まり問題になっている。

今後の展望

・実際に東京湾を視察・調査するため、研究室が月1で実施する調査船に乗船予定。
・クラゲの生態展示をおこなう水族館を視察する。新江ノ島水族館、すみだ水族館他。
・東京ウォータータクシーと共同してミズクラゲ観察ツアーを検討。(AKI INOMATA)



photo: Hirokazu Abeki

AR-3 アーティスト・リサーチ-3

齋藤彰英 | 等々力溪谷および多摩川河川敷

アーティスト: 齋藤彰英 ①2019年12月25日 ②等々力溪谷および多摩川河川敷 ③アベキヒロカズ、四方幸子、山本敦子

軟弱地盤が広がる東京において、高層建築を可能にした一つの要因は、東京礫層と呼ばれる地層だという。東京礫層の成因は不明なことも多いが、数十万年前の東京に流れた河川が山から砂利を運び作ったと考えられており、礫層の上に堆積する東京層の基底となっている。その礫層に杭打ちすることで、高層建築が可能となっている。たとえば、2014年竣工の東京スカイツリーでは、地下40mの礫層に杭を打ち込み、634mのタワーが建てられた。つまり、かつて東京に流れていた「大河/水」によって、今見る東京の景色は作られたとも言えるだろう。

今回は「水(*)開く」をテーマとする作品に向け、礫層のリサーチを行なった。しかし、東京礫層を目視することは困難である。なぜなら、前述したように礫層は地下40mの深さに広がっているからである(西方に向かうにつれて地表面に近づく)。ゆえに今回は同じ性質を持つ武蔵野礫層および、その上下に堆積する地層をリサーチした。場所は等々力溪谷(世田谷区)である。

等々力溪谷は武蔵野台地を川が侵食し作り出した自然地形である。高低差は18m程あり、溪谷を取り囲む木々によって気温が1~2度低くなっていた。溪谷の崖地面には下層から順に、上総群(海成層約100万年前)→武蔵野礫層(河成層12-6万年前)→関東ロー層(陸成層3-6万年前)の堆積が確

認できた。上総層の表面は黒々としており、粘性土の非常に硬い地層ゆえか、斜面に生息する木々の根はその地層境界面で成長が止まっていた。

一方、武蔵野礫層には丸みを帯びた5mm~70mm程度の小石が敷き詰まっており、指で穿ると塊が溢れでてきた。率直な感想としては、この脆さで果たして建築を支えられるのであろうか?といった感じであった。しかし、その小石の丸さは、明らかに川底で見られる石と同じ形状をしており、川が運び堆積させたこと実感させ、頭上に見る礫層の高さに6万年前の多摩川の流れを想起させた。また、水を通さない上総層に対して、武蔵野礫層では礫と礫の間を通して水が染み出していることを確認できた。さらに、瀧轟山等々力不動尊の近くでは、崖面から滝となって水が流れ出ており、その水もまた礫層からのものであった。この滝は不動滝と呼ばれ、古くから修験者の行場となっているという。

礫層の上層には関東ロー層が堆積している。崖地から住宅地につながる長い階段を上っていくと、ロー層の証である赤土に触れることができた。「東京は赤土で出来ている」とよく聞かすが、23区内で実際に赤土に触れたのは初めてであった。また、ロー層には古墳時代末期から奈良時代に造られた横穴墓がいくつか見つかっている。このことはロー層の水分保持(滲み出な

い)によって、水による内部侵食を防ぐ効果を目的としたと考えられている。つまりロー層は水に対して、礫層と逆の効能を持っていると言える。不動滝と横穴墓を通して、かつての人々は地形や地質を理解し、「恵みの水/害をもたらす水」を巧みにコントロールし利用していたのではないかと感じた。

溪谷に流れる川は、そのまま多摩川に流れ出ている。その合流地は、2019年に発生した台風19号による被害を受けた場所でもあった。そのため、2ヶ月は経っているものの、その痕跡を確認するため多摩川へと足を伸ばした。

多摩川河川敷といえば、美しく整備された情景を思い浮かべる。しかし、実際に広がっていた景色に私たちは愕然とした。なぜなら、あらゆるものが川下に向かい薙ぎ倒され、グラウンドには泥が波打ち堆積し、5mを超える木の枝には、押し流されてきた様々なものが絡み付いていたからである。頭上にぶら下がるその絡み付いたゴミや流木を見上げた時、私たちは氾濫間近となった多摩川の水量を想起し、水が持つ恐ろしさをまざまざと実感した。一方で、60cm以上に及んで堆積した泥には、既に青々とした草花が生い茂っていた。それは「川や海が新しい地層を作り出す」ことを体現した景色であり、水がもたらす脅威と生命循環の力を表しているようでもあった。(齋藤彰英)

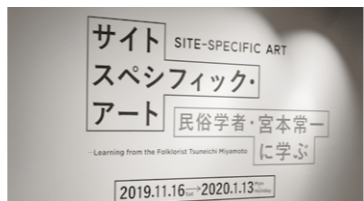


photo: Hirokazu Abeki

QR-2 オープン・ウォーター・リサーチ-2

市原市 - 市原湖畔美術館と周辺

📅 2020年1月13日 📍 市原湖畔美術館と周辺

👥 アベキヒロカズ、四方幸子

東京湾を挟み東京のほぼ対岸に位置する千葉県市原市は、房総半島の南へ向かい太平洋との分水嶺へと至る広域を占めている。かつては農業、戦後には東京湾に面した地域が京葉工業地帯の一部を構成、現在は海から内陸へと住宅が占める北部地域を含め、市全体が東京湾から内陸へとなだらかなスロープを形成している。

市原は、2019年秋に複数の台風に見舞われた。9月9日の台風15号、10月14日の台風19号、そして集中豪雨となった10月25日の台風21号による建物破損、越水や浸水、土砂災害など甚大な被害は、復旧が進められたもののまだ爪痕が残る。その状況の確認とともに、市原湖畔美術館での「サイトスペシフィック・アート～民俗学者・宮本常一に学ぶ～」展(2019年11月16日～2020年1月13日)の最終日を訪れた。美術館も台風で被災し(停電。作品にも影響)、また小湊鉄道が一部区間運休、最寄りの駅(高滝)も含まれており、訪れることが困難になっていた。年明けになって高滝駅への運行は復旧したため、小湊鉄道で向かうことができた(全線開通は2020年1月27日)。

小湊鉄道線は、工業地帯である五井(2011年3月11日の東日本大震災では、コスモ石油千葉製油所で大きな火災・爆発が発生)に発し、房総半島中央部の養老溪谷近くの上総中野までを結ぶローカル線で、レトロな風情の電車や駅舎が知られている。

市原市は、鉄道で回遊してもらう芸術祭「いちらはアート×ミックス」を近年展開している。路線は養老川の流れにほぼ沿っており、始発駅がある五井で川は東京湾に注いでいる(東京の水を「共有」している)。

暖かく晴れた当日、ビルや住宅が立ち並び五井駅から乗車、電車は緩やかなスロープを登り続け次第に田畑の割合が増えていく。高い山がない千葉県ならではの風景である。台風から2カ月が経過したものの、ブルーシートが被せられ石が乗った住宅の屋根が車窓から時折り確認できる。景色に緑が増えていくなか、高滝駅に到着。ここから3駅目の月崎には、約77万年前に地磁気が最後に逆転したことを証明する地層「チバニアン」(2020年1月17日国際地質科学連合が「Chibanian(千葉時代)」と命名)がある(今回は視察を断念)。高滝駅から小山を超えて高滝神社を経由し、そこから見晴らせる高滝湖(養老川を堰き止めたダム湖)へと降りる。湖に架かる赤い橋を渡ると、ポートが並んでおり、内陸の行楽地として人気のお宝である。市原湖畔美術館は、ダム湖を見下ろす高台に佇んでいる。

「サイトスペシフィック・アート～民俗学者・宮本常一に学ぶ～」展(オープン・ウォーター実行委員会メンバーでデザイナーのアベキヒロカズがグラフィックを担当)は、日本各地で地域の人々に寄り添ったフィールドワークを行い、膨大な本や写真、資料を遺した市

井の民俗学者・宮本常一(1907-1981)を起点に、彼の活動を含め民俗学的アプローチやフィールドワークが美術で注目されている近年を反映し、国内各地の活動や施設の紹介、そしてリサーチを中心とした7アーティストの活動を紹介する3章構成となっている。アーティストの2人は市原で制作されたものを展示、その一つでは秋の台風被害が扱われていた。本展は、前述の「いちらはアート×ミックス」との関連企画でもあり、他のアーティストも市原で作品制作をして発表するという。本展には、筆者が仕事をしたことのあるアーティストも何人か参加しており、その中の一人、中崎透に会場で会い話を聞くことができた。

帰途につく15時過ぎ、湖にかかる赤色(色の落ちた赤)の橋が晴れた水上に映り、ピンクの虹のように見える煌めきが、忘れがたい美しさであった。自然の流れを堰き止めたダムが湖となり、新たな「自然」として人々に親しまれている。そのことを愛でつつ、沈んでしまった地域の歴史や自然に想いを馳せ、房総半島の成り立ち、チバニアンや養老溪谷、養老川をはじめとするこの地の形成へと想像を広げる。その上であらためて、秋の台風でダム湖の下流で起きた氾濫という、今私たちが直面している現実へと向き合う必要性を実感した。(四方幸子)



photo: Tokyo Great Kayaking Tour

QR-3 オープン・ウォーター・リサーチ-3

カヤックで巡る東京都心の川

📅 2020年1月18日 10:00～12:00 📍 亀島川～日本橋川 🗺️ 四方幸子 協力: 東京グレートカヤッキングツアー

👥 阿部彰(建築家・都市プランナー、まちふね 未来塾 常務理事)、小田弘美(株式会社東京アーバンカヤック 代表取締役)、中川浩(まちふね 未来塾)、三浦秀彦(「大気の入江」アーティスト)

アベキヒロカズ、四方幸子、山本敦子 🗺️ Carlos、ゲラ/東京グレートカヤッキングツアー

亀島川は日本橋川下流の霊岸橋付近でバイパスのように分かれて隅田川へ流れ出る小さな河川である。多くの東京の川が埋め立てられ暗渠化される中、亀島川は奇跡的に川のまま現存し、今もほのかに昔の風情を残している。

その亀島川沿いにオフィスを構える東京グレートカヤッキングツアー(以下、TGKT)の協力を得て、カヤック体験を行った。東京の川を使ったアクティビティのリサーチおよび体験を目的としたものである。近くに事務所を構える阿部彰氏によると、TGKTは亀島川をベースとしたカヤックと自転車のツアーを行う会社で、東京の同種のツアーを行う会社では歴史が古いという。

準備体操をして、漕ぎ方のレクチャーを受けたのち、さっそくカヤックに乗り込む。船体を着けるコンクリートの岸の高さと水位が合っていて乗り込みやすい。これは普通の川であればさして特筆することではないが、隅田川を通して海に近い亀島川では意外と気にすべきことだと筆者は思う。海に近いということは潮の影響を受けやすい。つまり、日によって、あるいは時間によっても水位が変化する。こうして乗り込みやすい水位となっているのは、主催者側がその日の潮位に合わせてツアー開始時間を設定していたおかげだったのである。

話は少し逸れるが、昨年水上タクシーでリサーチを行った際、ルートを決めるためにはやはり当日の潮の満ち引きを考慮することがあった。日によって潮位の関係で通過できない橋があるためである(潮位が上がると船が橋の下を通る高さが確保できないため)。水上タクシーでルートを設定する際、その日の潮汐を読むことが重要となってくる。陸上のタクシーと少し勝手が違うので、人によってはこれを不便ととらえるかもしれないが、筆者はそのように月の満ち欠けやその日の潮の動きを気にすることは、本来の自然な時間感覚を取り戻している気がして心地よい。

さて、今回のコースは亀島川から日本橋川に出て日本橋を目指し、阿部氏の提案でその先の常盤橋まで足を伸ばすこととなった(隅田川を漕行するコースは風が強かったため中止)。

常盤橋は、日本橋から日本橋川に沿って500mほど北上したところに位置する。かつて江戸城の表玄関へつづく交通の要であった。明治初期に石造のアーチ橋に架け替えられ、阿部氏によれば東京で最も古い構造物のひとつのこと。東日本大震災での被災をきっかけに現在修復工事が行われている。今回のツアーでは完了間近の工事終盤の姿を見ることができた。

当日はあいにく小雪まじりの雨天となったため、雨を避けるため積極的に首都高の下のコースを取った。進んでいくうちに、カヤッキング=自然の中でやるものと筆者は先入観があるからか、周囲の風景が森でなく都会の景色であることに一種の倒錯感を覚えた。木の代わりにビルが立ち並び、雨を防ぐのはマンダロープのトンネルでなく川を覆う首都高、使い古された表現ではあるがまさにコンクリートジャングルである。

同乗していた三浦秀彦の「岸からわずかにしか離れてないのに、この浮遊感は面白い」という言葉も印象的だった。その浮遊感は水面のゆらぎもさることながら、先に述べた都市とカヤッキングのイメージのギャップも手伝っているかもしれない。完全に首都高を地下化し、昔の風景を取り戻すことはそうそうできない現状において、この都市の景観はこれこれ味深いものにとらえても良いかもしれない(とは言え、やはり日本橋の付近は空が抜けていた方が良くと思う)。

ガイドの方は、曇りくらいの方が一番都市の雰囲気が出ると言っていた。たしかに、これが快晴だったらまた違った印象を持ったのかもしれない。空を覆った雲が景色を灰色にくすませ幽玄な都市構造物の森を想像させた。水環境から新しい東京の表情を垣間見る貴重な体験となった。(アベキヒロカズ)



AR-4 アーティスト・リサーチ-4

山川冬樹 | 首都圏外郭放水路：地下神殿にみる世界の姿

アーティスト：山川冬樹 ① 2020年1月27日 16:00~17:00(ツアー)
 埼玉県春日部市 人 アベキヒロカズ、四方幸子、齋藤彰英、山本敦子

「Infra」とは「下の」という意味を持つラテン語の接頭辞であり、「Infrastructure」とは、文字通り私たちの生活や産業の下部に隠された巨大な構造のことを指す。近年、「インフラツーリズム」という言葉とともに、インフラストラクチャーをその本来の機能とは別に観光資源として利用しようという動きが活発化しており、先日訪れた埼玉県春日部市の地下にある首都圏外郭放水路の調圧水槽は、最も人気のインフラツーリズム・スポットとなっている。

見学でまず驚かされたのは、地上世界と地下世界との間のギャップである。地上には殺風景な運動場があり、その周辺を近隣住民が犬の散歩をしていたりと、少々物憂げな関東郊外の日常風景が広がっている。運動場のはずれには、ぼつんとコンクリート製の物置のような小屋が建っていて、ツアーガイドがその小屋を解錠し、扉を開けた瞬間、奥深くから長い残響が聴こえてきた。そこは地下に隠された異世界への玄関であり、地上という意識の世界から、地下という無意識の世界へ降りていくための入り口だったのだ。ガイドの案内とともに見学者たちが次々と小屋の中に吸い込まれていく。そして暗がりの中、長い階段を降りて

いくと、突然地上のスケール感を遥かに超えた、古代都市の遺跡のような風景が目の前に広がった。

古くから地下世界は人間の想像力や妄想を喚起してきた。さまざまな宗教において地獄は地下深くにあるとされてきたし、地球空洞説のような疑似科学や、アジアのどこかの地下にあるとされる理想郷アガルタの伝説、SFの父ジュール・ヴェルヌの小説『地底旅行』(1864)、あるいは近年のハリウッド映画に頻りに登場するのをもみても、古くから現代に至るまで、地下世界は人間が自らの夢想や妄想、神秘や謎、畏れや恐れ、信仰や無意識といった、理性に対立する人間の非合理的な精神活動を投影するためのメディアとして機能してきたことがわかる。

首都圏外郭放水路の調圧水槽が興味深いのは、国家的都市計画を担ってきた近代の理性と、古代から無意識に受け継がれてきた人間の非合理的な精神活動とが、図らずもその圧倒的な空間の中で混じり合いながら共存してしまっている点である。とりわけこの世のものと思えないほど長く美しい残響は印象的で、それは人に否応なく宗教的な畏怖の念を喚起し得る響きを持っていた。先史時代の人間は洞窟の中の特に美しく響

く地点を選んで儀式を行ったという研究があるし、ヨーロッパの教会やイスラムのモスクなどをみても、宗教建築は音響装置でもあり大抵美しい残響を持っている。また巨大な柱が立ち並ぶような構造の調圧水槽は、その建築的特徴から人々に“地下神殿”と形容され、当の国土交通省までその宗教的なメタファーを好んでPRに用いているが、そこには「荒ぶる神」=「自然災害」を鎮めるための神殿というイメージが無意識に重ね合わせられているのかも知れない。

もしかすると首都圏外郭放水路の巨大な空間には、世界の本当の姿が隠されているのではなからうか。地球科学と土木技術を総動員し、国土の治水と防災のために造られたこの圧倒的な地下建造物は、その本来の機能からはみ出して、私たちに宗教的、哲学的、芸術的、考古学的な問いを投げかけてくる。プラトンが『国家論』で語った洞窟の比喩では、洞窟の中に住む囚人は一方向に向けて縛られながら視線を固定され、世界の本当の姿を見ることができないが、現代を生きる私たちは情報化によって「enlight」されているようで、実際には逆に情報に縛られ、洞窟の中の囚人のように虚像を見せられ続けているのではないかとすればむしろ私たちは積極的に地下世界を旅する旅人となり、洞窟に潜り込むようにして都市構造の深層へと降りていき、その暗がりに目を凝らさなければ、世界の本当の姿を見ることはできないだろう。(山川冬樹)

今年度の成果と今後に向けて

「オープン・ウォーター〜水(*)開く」(以下OW)は、2020年夏、東京オリンピック・パラリンピックの時期にあわせて、東京の水辺で展覧会およびツアー・イベントを開催することを目指し、2018年より活動を開始した。当初は、東京の河川や水辺環境に興味を持った有志による自主的な活動として始まったが、2019年度河川財団より河川基金の助成を受けたことで、活動の幅が大きく広がった。

今年度の活動は大きく分けて以下の3つに分類される。

1. 調査(フィールドワークおよび作品制作のためのリサーチ)
2. 研究(専門家をお招きした研究会)
3. オープン・ウォーター・ピクニック(河川および水辺での新しい体験の提案)

1. 調査

東京および周辺の河川や水辺環境のフィールドワーク(オープン・ウォーター・リサーチ)と、展覧会に参加予定のアーティストによる作品制作のためのリサーチ(アーティスト・リサーチ)を行った。フィールドワークでは、毎回テーマを設定し、船に乗ったり、歩いたり、さらにはカヤックを漕いだりと、さまざまな角度から現在の河川の状況を調査した。川はつながっているので、源流を訪ねて埼玉県など近県にも足を延ばし、行政区では区切れない土地の記憶に分け入ることができた。アーティストのリサーチでは「東京の水・河川」というテーマからさまざまな想像力を飛躍させ、ジオグラフィックなリサーチをはじめ、クラゲから金融まで東京という都市と水の関係を可視化することが期待される調査となった。

2. 研究

実際に河川や水辺に向かうフィールドワークとともに力を注いだのは、東京の河川や水環境、都市と河川との関係に詳しい専門家の話をうかがう研究会である。豊かな水に恵まれ、河川を生活に活用する都市として発達してきた江戸・東京は、しかし一方で水害が非常に多い土地でもある。江戸開闢以来水害と戦ってきたこの土地の歴史と経験を未来に生かすためにはどうすればよいのか、それぞれの専門家のお話は大変興味深く、今後の活動の大きな参考となった。一方、これらの専門家の研究成果を、いかに一般の市民にわかりやすく伝えられるのか、ということが課題として認識された。これについては、アーティストによる作品展示というアプローチで、河川や水に関するさまざまな課題を可視化することを検討していきたい。

3. オープン・ウォーター・ピクニック

オープン・ウォーター・ピクニック(以下OWP)は、OWがコンセプトとして掲げる「水(*)開く」を実現するための具体的な提案である。かつて江戸時代には、舟遊びや橋のたもとや小路など、人々と水辺の距離は近く、水辺は遊興と深く結びついていた。かつての人と水との関係を取り戻すべく、現代の水辺での楽しみ方を模索し、実験し、広めていきたいと考えている。今年度はテストケースも含め2回のOWPを実施した。いずれも五感で水辺の環境を体感することができ、忘れ難い体験となったが、いくつかの課題も浮上した。ひとつは、現代では水辺空間で火を使用したり、音楽を奏でたり、ということが非常に困難であるということである。ルールは必要であるが、水辺を多くの人が利用し、楽しむことができるような新しい仕組みを検討すべきであると実感した。

このように、助成を受けたことにより、調査、研究とともに具体的なアクションをスタートすることができ、2020年夏の展覧会実施に向けた大きな前進となった。水辺を利用した展覧会の実施とツアー・イベントというこれまでにないアプローチは、河川と水辺環境を多くの人に向けて開く大きな可能性を秘めていると考える。一方で、河川および水辺環境には多くの利用規制などがあり、さまざまな困難が予想される。また、このレポートを執筆している現在、東京は新型コロナウイルス感染症の「感染爆発の重大局面」に直面しており、東京オリンピック・パラリンピックも1年の延期が決まり、今後の東京をめぐる状況の見通しは立っていない。

川は人や物、豊かな文化だけでなく、生活を脅かすさまざまな脅威をも運ぶ存在である。国境は封鎖できても川の流れを止めることはできない。このような状況下で、河川のもつ両義性を改めて実感しているところである。

2020年3月31日

オープン・ウォーター実行委員会 プロデューサー 山本敦子





神保町～神田リサーチツアー

📅 2018年6月25日 📍 神保町エリア 📄 四方幸子

👤 柴俊一

👥 船橋和花(コマンドN)、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

東京オリンピック(1964)前年から10年間の10代に神田で育った柴氏(編集者)によるツアー。出版社や書店が集まる神保町～小川町を経て、住んでいた神田司町界隈を回り、パーソナルな記憶とともに地域そしてコミュニティの変遷をたどることができた。(四方幸子)

大伝馬町～日本橋リサーチツアー

📅 2018年6月30日 📍 日本橋エリア 📄 四方幸子

👤 新野圭二郎(NICAディレクター、株式会社N STUDIO 代表取締役)

👥 船橋和花(コマンドN)、齋藤彰英、四方幸子

日本橋を拠点に10年、地域の歴史を丹念に調べ、この地に根ざす人々との関係を築いてきた新野氏に、日本橋のリサーチツアーをお願いした。江戸時代以降、日本の中心として都市やインフラが構築され、全国から人や物資で賑わったこの地域の歴史・文化を掘り下げるものとなった。彼が拠点とする大伝馬町(江戸時代には著名な浮世絵を始めとする出版元がひしめき、大丸呉服店や吉原があった)から日本橋～常盤橋へと歩中、幕府設置と同時に必要となったインフラ構築の様相を知り、かつて作られた道や水路の痕跡を辿り、また多くの老舗を見学した。度重なる災害(大火や大地震)によって変貌した都市機能の様相や、舟運や街道により賑わった日本橋や日本橋河岸やそこに暮らした人々の営みの名残、そして明治時代から現在に至る都市や建物の変遷も確認することができた。(齋藤彰英+四方幸子)



ミツカン水の文化センター 「第10回 発見!水の文化～船でめぐる東京の水辺(江東の内部河川編)～」

📅 2018年10月13日 ルート: 豊洲ぐるり公園乗船場～豊洲～小名木川・旧中川・東京スカイツリー・横十軒川エリア 📄 ミツカン水の文化センター

👤 高松 巖(一般社団法人 まちふね みらい塾 代表理事)

阿部 彰(一般社団法人 まちふね みらい塾 常務理事)

👥 アベキヒロカズ、齋藤彰英、山本敦子

ミツカン水の文化センターが2017年よりスタートさせたイベント「発見!水の文化」のツアー。豊洲ぐるり公園船着場から出発し、江東の内部河川をめぐった。コースは荒川ロックゲートを通り、最大3.1メートルにもなる荒川と旧中川の水面差を体感。旧中川は、地域の大きな再開発で再生された親水河川で、緑豊かで人と水の距離が近い。カヌーや釣りを楽しむ人、川沿いの緑道を散歩する人、川辺のベンチで談笑する人たちの姿も多く見られ、水辺と生活者のつながりをうかがうことができた。(アベキヒロカズ)

羽村取水堰、村山貯水池(多摩湖)

📅 2018年11月24日 📄 齋藤彰英

ルート: JR青梅線「羽村駅」東口集合～五ノ神 まいまいず井戸～羽村取水堰

～(横田空軍基地前通過)～吉祥山遺跡～狭山湖～多摩湖

👥 アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

多摩川の河口上流約54kmに位置する羽村取水堰は、江戸の人口増加による飲料水不足を解消するために開削された玉川上水と同時に建設され、1653年に完成。1900年、1924年の増改築を経て現在も使用されている。大雨によって多摩川の水位が上がると桁を外して堰自体を下流に流し、堰の安全性を確保する投渡堰は世界的にも珍しい。自然の力に逆らうことなく堰や水門を守り、洪水を回避することができる昔からのこの治水技術が途切れることなく現在まで伝わっているとのことである。羽村市郷土博物館では水門の実物大展示や江戸時代の堰の模型などを見学した。

羽村取水堰からの取り入れられた水が送られる村山貯水池は1927年完成の人造湖である。東京市(当時)の人口増加に対応した水源確保のため東京都と埼玉県にまたがる狭山丘陵を利用して造られたアースダム形式の貯水池で、東京都で最大の湖でもある。堤体に立つとその規模の大きさを体感できる。

東京という巨大都市圏の水を支える2つの施設を訪れた視察のスタート地点、JR羽村駅前の五ノ社神社境内には「まいまいず井戸」が保存されている。多摩川の扇状地である武蔵野台地特有の井戸の一種で、地表面をすり鉢状に掘り下げて底の部分から更に垂直の井戸を掘る構造である。

まいまいず井戸から取水堰、アースダムと、先人たちが土地や気候の特徴を生かし、土木技術を駆使して生活に必要な水を確保してきたことが確認できた視察となった。(山本敦子)



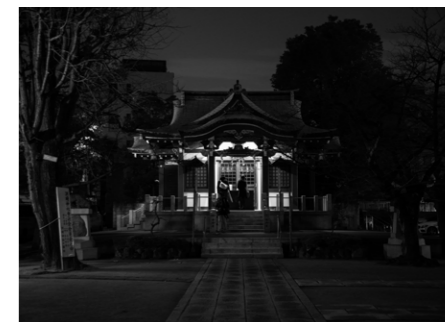
両国～深川～洲崎 水辺の聖と俗～江戸の風景を訪ねて

📅 2018年12月16日 📄 山本敦子

ルート: 両国駅集合～両国橋、広小路跡、回向院、江島杉山神社～芭蕉記念館～芭蕉庵史跡展望公園～富岡八幡宮～洲崎神社～洲崎橋跡地～洲崎遊郭開始以来先亡者追善供養碑～南開橋

👥 アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

江戸時代の水に関わりがある聖地と盛り場を巡る旅は、回向院からスタートした。武蔵と下総をつなぐ両国橋の東にかつて正門があった回向院は、明暦の大火(1657)当時橋がないため隅田川を渡れず10万人に及んだ死傷者の慰霊に由来し、以後無縁仏や動物を供養する。大火後、橋の袂に作られた広小路(火除け地)は名所となり、この地で始まった慰霊の花火や相撲は祝祭性を帯びていった。関東大震災や東京大空襲の死者を祀る東京慰霊堂も含め、両国はまさに慰霊を担っている。江島杉山神社や芭蕉記念館を見学後、隅田川を展望し、小名木川を経て清澄庭園に至る頃には夕闇となる。富岡八幡宮(1627)を經由し、木場へ向かう途中で複数の津波警告碑に出会う。洲崎神社(1700年当時:洲崎弁天社)の近隣は、江戸時代の潮干狩りの名所だが、今はビルが立ち並ぶ(筆者が以前住んでいた場所もかつて海だった)。明治中期、神社に隣接する洲崎弁天町(現:東陽一丁目)に遊郭が移転、第二次大戦中に閉鎖されるも戦後直後に「洲崎パラダイス」として復興し1958年まで続いたが、当時の面影を探すのは容易ではない。神社の近くの遊郭は、参拝後に禁欲を解放するためともいわれるが、まさに水際が「聖と俗」、つまり人の欲望や業と深く関わる場だということを各地で実感した。(四方幸子)



東京ウォータータクシー(TWT)で巡る河川と高橋散策

🕒 2019年1月27日 14:00~17:00 📍 四方幸子

ルート：日本橋～亀島川～隅田川～小名木川～大横川～仙台堀川～平久川～高橋

👥 陣内秀信、山口崇洋(やんつー)、アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

特別同行：井上結菜(TWT広報)

東京ウォータータクシー*(以下、TWT)を使ったりサーチは、陣内秀信氏の監修により日本橋から出発し日本橋川を下り、亀島川を通って隅田川に出たのち、小名木川から深川エリアへ入るルートを取った。深川エリアでは、大横川、仙台堀川、平久川など、水上タクシーでしか回ることのできない東京東部の細かな運河を確認した。

水路を巡りながら、かつて多く停留していたボートや屋形船、並んでいた蔵のことなど、昔の様子を陣内氏に説明を受ける。隅田川では、TWT井上氏が東京ゆかりの鳥・ユリカモメを呼び寄せてくれて、旋回する船についてくる彼らの美しい飛翔姿を見ることができた。また渡り鳥であるユリカモメが、都市化された東京に今でもロシアから渡ってくるのは、かつてこの地が湿地帯だったことを本能的に記憶しているからではという井上氏の話に、あらためて江戸・東京が水にゆかりのある土地であることを実感した。

高橋で下船し、陣内氏が用意した明治13年時の水路網マップを確認した。現在と比較にならないくらい張り巡らされた水路に驚くと同時に、当時の光景に思いを馳せた。その後、門前仲町の食糧ビル跡地(1983～2000年に佐賀町エキジビット・スペースがあった)を目指す。行く道すがら、街の景色から昔の面影が失われることに残念そうな表情をされていた陣内氏が印象的だった。過去と現在を比較しながら都市の魅力に思いを巡らす貴重な機会となった。(アベキヒロカズ)



*小型船による水上タクシー事業を行う企業。観光だけではなく日常利用、災害時の輸送手段として出動することを目的とし2015年に設立された。

中央防波堤埋立処分場

🕒 2019年3月22日 📍 中央防波堤 📍 齋藤彰英

ルート：東京都廃棄物管理事務所～粗大ごみ破碎処理施設～不燃ごみ処理センター～中央防波堤外側埋立処分場

👥 山川冬樹(アーティスト)、アベキヒロカズ、齋藤彰英、四方幸子、山本敦子

中央防波堤埋立処分場は東京湾防波堤の南北地域を利用した東京都の埋立地である。中央防波堤内側埋立地にある東京都廃棄物管理事務所では説明を聞いた後、粗大ごみ破碎処理施設、不燃ごみ処理センターを見学。その後、中央防波堤外側埋立処分場へと向かった。

ごみの埋立量を少なくし、最終処分場の使用可能年数を伸ばすために、ごみを中間処理施設で焼却・破碎するが、可燃ごみ全量焼却体制が整ったことにより、可燃ごみは全て焼却灰となって埋立処分場に運ばれてくることになり、悪臭や害獣、害虫の問題も解決されたそうである。

埋め立て処分場は、焼却残灰や不燃ごみ等を3m埋め立てたうえに土50cmを被せ、またごみを埋め立て土を被せるというサンドイッチ埋立工法である。訪れたのが3月下旬ということもあり、埋め立て地では菜の花や桜が満開で、その下にたくさんのごみが埋まっているというのは不思議な気分になる。以前は生ごみも埋め立てられていたため、カラスやゆりかもめなどが埋立処分場に集まっていたそうだが、今はそのような光景も見られず、静かな景色が広がっている。新海面処分場では着々と海が埋め立てられているが、あと50年で埋め立て地は満杯になるとのことで、ごみの減量と再資源化は喫緊の課題であることが実感できた。(山本敦子)



photo: Hirokazu Abeki

オープン・トーク Vol.0 『マイパブリックとグランドレベルと東京の水辺』

🕒 2019年2月21日 📍 アベキヒロカズ

ゲスト：田中元子 他登壇者：アベキヒロカズ、四方幸子

👥 齋藤彰英、山本敦子、他一般参加者30名

OW主催の初の試みとして田中元子氏(グランドレベル取締役)をゲストにトークイベントを行った。会場には彼女が2018年から運営する「喫茶ランドリー(墨田区)」を使用し、ここに至るまでの「場づくり」の経験を伺った。彼女にとって重要な転機となったのが、2014年に「URBAN CAMP TOKYO」と題し開催した都内空き地(4000平米)を活用したキャンプイベントであった。彼女は参加者を飽きさせないため、様々な催しを企画し一泊二日のイベントを行った。しかし参加者の反応はイマイチだったという。忙しい都市で生活する参加者たちは、むしろ目的を持たない自由な時間や、能動的な場作りを求めて集まっていたからだ。その経験を活かし、「喫茶ランドリー」は運営されている。彼女自身はイベント等を一切企画せず、ただ誰でも利用できる「居場所」を作った。その姿勢は利用者の自発的活動やアイデアを誘発し、開設6ヶ月で100本のイベントが利用者自身によって行われた。当イベントでは、そうした田中氏の経験や、会場に訪れた参加者らの意見などを交え、東京の水辺活用方法など幅広い意見交換の場となった。(齋藤彰英)



文献リスト

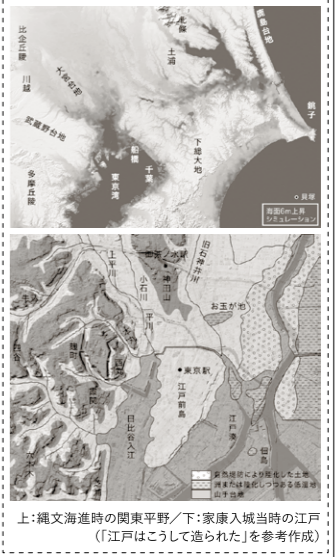
- 陣内秀信『東京の空間人類学』(筑摩書房 1985 / ちくま学芸文庫)
- 鈴木理生『江戸の川 東京の川』(放送ライブラリー 日本放送出版協会 1978 / 井上書院 1989)
- 鈴木理生『江戸はこうして造られた』(『幻の江戸百年』(筑摩書房 1991)を改題 / ちくま学芸文庫)
- 川田順造『江戸=東京の下町から 生きられた記憶への旅』(岩波書店 2011)
- 貝塚爽平『東京の自然誌』(講談社 学術文庫 2011)
- 法政大学エコ地域デザイン研究所『外濠 江戸東京の水回廊』(鹿島出版会 2012)
- 陣内秀信+法政大学陣内研究室 編『水の都市 江戸・東京』(講談社 2013)
- 竹村公太郎『日本史の謎は「地形」で解ける』(2005, 2007年刊行物を再編集 / PHP研究所 PHP文庫、2013)
- 土屋信行『首都水没』(文春新書 2014)
- 「江戸楽」編集部『古地図で歩く江戸・東京』(メイツ出版 2018)
- 土屋信行『水害列島』(文春新書 2019)

《水運形成に見る都市の発展》

約12万年前
(最終間氷期)
気温上昇に伴い海面が上昇し、関東地方が海に覆われる。

約2万年前
(最終氷期)
気温低下に伴い海面が現在よりも120m低下。

6000年前
(後氷期)
現在よりも海面が4m前後上昇し、関東地方に地塊段丘を形成。



上: 縄文海進時の関東平野 / 下: 家康入城当時の江戸
(「江戸はこうして造られた」を参考作成)

1457年 (長祿元)

江戸城築城

徳川家康入城

小名木川開削

小石川上水開設

道三堀開削
平川付け替え

日比谷入江
埋め立て

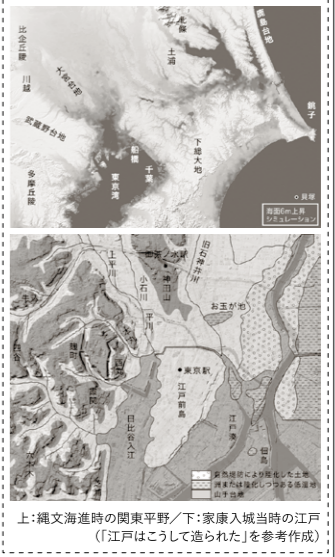
江戸開府

旧石神井川付替

第一次天下普請

江戸廻船

神田山切り通し開削



大田道灌、麴町台地の先端に江戸城(旧本丸・旧二ノ丸)を築城

行徳・千草市川市で生産する塩を運ぶ為の、旧中川から隅田川を繋ぐ東西一直線の運河

大久保藤五郎が豊島区栗町の粟島神社の弁天池をおもな水源とす小石川を活用後、神田上水



日比谷埋め立てを目的に、平川を道三堀に流した。道三堀は、江戸城建造の為に多くの物資を運んだ(一部は現日本橋川流路)

城郭工事で生じた土砂を利用して、第一次天下普請時に大部分が埋め立てられる

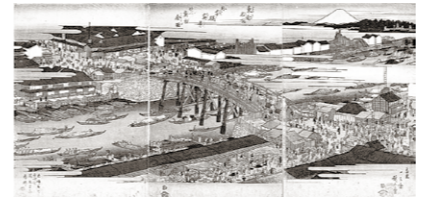
同年日本橋架橋

日本橋周辺の砂州化洪水対策として、隅田川に付け替えた。これにより日本橋は安定的に河岸地帯が整備された(※諸説あり)

江戸城建設や、河川等の大型公共事業を行う。第五次(1636)まで続く

堺の船問屋によって、大阪→江戸の定期航路が整備される

神田山(本郷台地)を湯島台と駿河台に分割し、平川放水路を開拓(現「神田川」)



菱垣廻船組織設立

神田上水開設

旧江戸橋架橋

大名火消の制

玉川上水路計画

明暦の大火

亀有上水開設

神田川改良工事

東廻り廻船成立

江戸町人口
35万人超

中堂火事

宝永地震
宝永大噴火

関東地方御用掛

町火消「いろは」
四上水 廃止

成年の荒れ

浅間山噴火

利根川大洪水

ペリー 来航

安政江戸地震

大政奉還

1867年 (慶応3)

1592-17年 (文禄元-慶長15)

1603年 (慶長8)

1605年 (慶長10)

1606年 (慶長11)

1616年 (元和2)

1620年 (元和6)

1629年頃 (寛永6)

1631年 (寛永8)

1634年 (寛永11)

1652年 (承応元)

1657年 (明暦3)

1659年 (万治2)

1660年 (万治3)

1671年頃 (寛文11頃)

1693年 (元禄6)

1698年 (元禄11)

1707年 (宝永4)

1722年 (享保7)

1742年 (寛保2)

1783年 (天明3)

1786年 (天明6)

1853年 (嘉永5)

1855年 (安政2)

- 1972年 (明治5)
- 1882年 (明治15)
- 1898年 (明治31)
- 1903年 (明治36)
- 1910年 (明治43)
- 1911年 (明治44)
- 1919年 (大正8)
- 1923年 (大正12)
- 1924年 (大正13)
- 1927年 (昭和2)
- 1931年 (昭和6)
- 1941年 (昭和16)
- 1948年 (昭和23)
- 1957年 (昭和32)
- 1960年 (昭和35)
- 1963年 (昭和38)
- 1964年 (昭和39)
- 1970年 (昭和45)
- 1995年 (平成7)
- 1997年 (平成9)
- 2008年 (平成20)
- 2013年 (平成25)
- 2018年 (平成30)
- 2020年 (令和2)

- 鉄道開通
- 馬車鉄道開通
- 淀橋浄水場通水
- 路面電車開通
- 荒川・利根川大洪水
荒川改修計画立案
- 市電開通
- 乗合バス開通
- 関東大震災
- 村山上貯水池完成
- 地下鉄開通
- 東京飛行場開港
- 東京港開港
- 東京大空襲
- 東京消防本部発足
- 小河内ダム完成
- 江東区「夢の島」
ゴミの埋立開始
- 東村山浄水場通水
- 日本橋首都高開通
- 東海道新幹線開通
- 東京オリンピック
パラリンピック開催
- 小作浄水場通水
- 阪神淡路大震災
- 東京湾アクアライン開通
- 神田川・環状7号線
地下調節池完成
- 東京オリンピック
パラリンピック開催決定
- 江東5区
防災情報発表
- 豊洲市場開業
- 令和元年房総半島台風
(台風15号)
- 令和元年東日本台風
(台風19号)
- 新型コロナウイルス
(COVID-19)
- 東京オリンピック・
パラリンピック延期

新橋一横浜(現「桜木町」)
東海道全線開通(1889)

新橋一日本橋(東京馬車鉄道)

コレラ菌等の衛生対策のため、近代水道化を目的とした濾過機能を有する浄水場を設置

新橋一品川(東京電報鉄道)

被災により荒川改修計画が立案され、大正・昭和期に岩淵水門を境とした上流・下流の大規模工事が進められる

「日本名勝写真図説」東京市眺望 / 画・圓報社(1940)

多摩川水系を貯水、隣接する山口貯水池完成(1934)
浅草一上野(東京地下鉄道株式会社)

現「羽田空港

日の出(頭(1925)、芝浦(頭(1932)、竹芝(頭(1934)を設置後開港

終戦直後から戦災水道施設の復旧工事が開始される

「大東京寫真帖」左: 新橋瀨から有楽町眺望 右: 上野-万世橋間地下鉄(撮影年: 詳細不明)

奥多摩町(標高530m)都心から約65kmに建設。発電機能を有す

10年間(45万)の埋立後、江東区若洲(71万)中央防波堤内側埋立地78万)外側埋立処分場(99万)等埋立が移る

淀橋上水道を廃止移設。その後、荒川水系(1964)、利根川水系(1965)が接続され、東京都最大の浄水場施設となる

前年開通「京橋」芝浦)の首都高が延長

関連「東名高速道路開通(1968)

昭和30年代以降多摩地域の急速な都市化に伴い設置

福井地震(1948)を契機に設定された「震度7」を初適用。以降震度7が適用された地震「新潟中越地震(2004)、東日本大震災(2011)、熊本地震(2016)、北海道胆振東部地震(2018)

最大深度43.6m/延長距離15.1km。3年後、最大深度49mの地下鉄大江戸線が開通(昭和39年開通の銀座線は16m)

環状7号線の地下約50mに建設し、神田川・善福寺川・妙正寺川の洪水約54万mを貯留

「江東5区大規模水害(ガードマップ)及び「江東5区大規模水害広域避難計画」を発表

千葉県を中心に暴風の被害を与え、関東史上最強の台風とも呼ばれた上記に加え、台風21号の記録的な大雨で建物破損、越水や浸水、土砂災害。台風19号では荒川も危険水位に、台風19号、21号では多摩川が氾濫した

各国の入国制限によって国際的な交通・経済の流れが遮断される

2021年夏までに開催予定

※2020年3月31日現在

執筆者、関係者プロフィール(掲載順)

四方幸子（しかたゆきこ）

キュレーティング/批評

多摩美術大学・東京造形大学客員教授。アートと科学を横断する展覧会やプロジェクトを1990年代以降キヤノン・アートラボ、森美術館、NTT ICCまたインディペンデントで実現。近年の仕事にSIAF2014、茨城県北芸術祭2016(キュレーター)、「Art, Media and I Tokyo (AMIT)」(2014・2018) ディレクター。

土屋信行（つちやのぶゆき）

公益財団法人リバーフロント研究所技術参与、工学博士
東京都で道路や橋梁、下水道、まちづくり、河川事業に従事。江戸川区土木部長、公益法人えどがわ環境財団理事長などを経て現職。東日本大震災の復興では、宮城県女川町のまちづくりに取り組んだ。著書に『水害列島』、『首都水没』(以上文藝春秋)。

竹村公太郎（たけむらこうたろう）

元国土交通省河川局長、日本水フォーラム代表理事
国土交通省で中部地方建設局河川部長、近畿地方建設局長を歴任し2002年国土交通省河川局長を最後に退官。2006年日本水フォーラム代表理事・事務局長。著書に『日本文明の謎を解く』(清流出版)、『土地の文明』(PHP研究所)、『幸運な文明』(PHP研究所)、『日本史の謎は「地形」で解ける』(PHP文庫)。

AKI INOMATA（あきいのまた）

アーティスト
生き物との協働作業によって作品制作をおこなう。主な作品に、都市をかたどったヤドカリの殻をつくり実際に引っ越しをさせる「やどかりに『やど』をわたしてみ」など。近年の展覧会に、「Significant Otherness生きものと私が出会うとき」(十和田市現代美術館2019・2020)、「相似の詩学ー異種協働のプロセスとゆらぎ」(北九州市立美術館2019)。

山川冬樹（やまかわふゆき）

アーティスト、パフォーマー
身体や声と社会や環境の関わりを探索しながら、現代美術／音楽／舞台芸術の境界を超えて活動。己の身体をテクノロジーによって拡張するパフォーマンスを得意とし、ホームメイの名手としても知られる。近年の作品に、ハンセン病療養所(瀬戸内国際芸術祭／大島青松園 2016-2019)の長期的な取り組みなどがある。

陣内秀信（じんないひでのぶ）

建築史家、法政大学特任教授、工学博士
専門はイタリア建築史・都市史。建築史学会・地中海学会・都市史学会の会長を歴任。東京を水の都として再生させる取り組みを行っている。著書に『東京の空間人類学』(筑摩書房、サントリー学芸賞)、『ヴェネツィア-水上の迷宮都市』(講談社)、『水の都市 江戸・東京』(編著、講談社)他。

やんつー（やんつー）

アーティスト
デジタルメディアを基盤に、行為の主体を自律型装置や外的要因に委ねることで人間の身体性を焙り出し、表現の主体性を問う作品を多く制作する。近年参加した主な展覧会に「第20回DOMANI・明日展」(国立新美術館2018)、「呼吸する地図たち」(山口情報芸術センター [YCAM], 2018)など。第21回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞(2018年)。

アベキヒロカズ（あべきひろかず）

アートディレクター／デザイナー
ミュージアム・デザインと情報編集の視点から、企業やプロジェクトのブランディング、展覧会・劇場公演の宣伝美術、書籍のアートディレクション・デザインを手掛ける。近年の作品に「武蔵野美術大学 優秀作品展 2019」、「CAFAA賞2020」など。展覧会に、「& (アンパサンド)がカタチをひらくとき」(川崎市市民ミュージアム 2016)。

齋藤彰英（さいとうあきひで）

写真家
糸魚川静岡構造線やフォッサマグナなどの地史を、フィールドワークによってリサーチし、作品制作を行っている。近年の個展に、「いつか」(ema gallery 2015)、「深く、より深く」(食とアートの廻廊：国営アルプスあづみの公園2014)、グループ展に「Rituals流体の景色」(アキバタマビ21 2016)、「海の聲」(三重テラス 2015)など。

山本敦子（やまもとあつこ）

アートプロデューサー、コミュニケーションプランナー
広報コミュニケーションのプランニングから、アートイベントの企画プロデュース、編集まで、コミュニケーションとアートのあわいで活動している。「さいたま国際芸術祭2020」(2018-2020) アシスタントディレクター。「ポイントホープ」(2019)、「Art Media and I Tokyo (AMIT)」(2014・2018) プロデューサー、など。

山本

山本

山本

山本

山本

山本

オープン・ウォーター 2019年度活動報告書
助成：河川財団

編集：四方幸子、山本敦子
写真：齋藤彰英
デザイン：アベキヒロカズ (ABEKINO DESIGN)

2020年3月31日
オープン・ウォーター実行委員会
108-0074 東京都港区高輪4-3-4 高輪ビル201
Tel: 03-3441-5726

Facebook

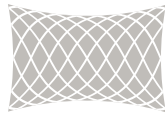
openwater2020

open_water_mizuhiraku

Instagram

©オープン・ウォーター実行委員会 2020





OPEN WATER